

循環型社会像の比較分析：その概念形成に向けて

Comparative Analysis of Images of "Junkan" Society: Toward Common Concept

○ 橋本征二*・森口祐一*・田崎智宏*・柳下正治**

S. Hashimoto, Y. Moriguchi, T. Tasaki, and M. Yagishita

1. はじめに

持続可能な社会を目指して、その一部であれ全体であれ具体的社会像を描くことは極めて重要である。循環型社会もそうした社会像を表す用語の1つとして、近年様々な場面で用いられようになった。しかし、それがどのような社会であるかのイメージは、その言葉を用いる人によって異なるようであり、循環型社会の制度・技術について議論する際にも混乱が生じている。本研究は、持続可能な発展の概念との関係を意識しながら、既存の循環型社会像の違いをいくつかの視点から比較分析したものである。

2. その英訳から垣間見られる循環型社会像

循環型社会という用語の英訳としては、recycling society、recycling-based societyのほか、material cycles oriented society、sound material-cycle society、closed loop society、sustainable societyなどが用いられている。リサイクルの進展した社会像がイメージされるrecycling societyと、いわゆる持続可能な発展が実現された社会像がイメージされるsustainable societyでは大きな違いがあり、その英訳からもそれぞれが描いている循環型社会像の違いが示唆される。

3. 持続可能な発展の概念

循環型社会像の具体的な検討を始める前に、循環型社会と関連の深い持続可能な発展の概念について簡単に整理しておく。持続可能な発展の概念には、大きく3つの要素がある。第1は資源や環境の有限性の問題、第2は貧困と生活質、言い換えれば経済の発展の問題、第3は資源利用面、環境面での公平性や、環境側面、経済側面の改善を担保する社会制度、価値観などの問題であり、本稿ではこれらをそれぞれ持続可能な発展の環境側面、経済側面、社会側面と称することとする。

4. 循環型社会像の比較分析

法律が定義する循環型社会像や国の法定計画、審議会等が描く循環、環などの言葉を用いた社会像を対象として比較分析を行ったが、その際、循環の概念（循環という言葉にどのような意味を込めているか）、目的（循環型社会が目的としているものは何か）、対策分野（目的を達成するためにどのような環境問題の分野に対策が施されるか）に注目した。

検討した循環型社会像からは4つの循環の概念が得られた（図1）。すべての循環型社会像に共通していたのは、「経済社会における資源循環」の概念である。また、多くの場合これが、「自然の循環」の概念とのアナロジーで示されていた。さらに、「環境と経済の良い循環」や「人や情報の循環」とでも言うべき概念もあった。以上4つの循環の概念のうち、「自然の循環」は持続可能な発展の環境側面に相当する概念と考えられ、「環境と経済の良い循環」「人や情報の循環」はそれぞれ経済側面、社会側面に言及したものと考えられる。

* 国立環境研究所 National Institute for Environmental Studies

305-8506 つくば市小野川16-2 TEL 029-850-2842 FAX 029-850-2917 e-mail hashimoto.seiji@nies.go.jp

** 名古屋大学 Nagoya University

循環型社会の 目的としては、環境保全や環境への負荷の低減と、天然資源の消費の抑制の大きく2つが得られた（図2）。これらの目的は、主として「自然の循環」の概念から導かれたものであり、持続可能な発展の環境側面に関連するが、これら目的自身がさらに経済側面や社会側面にも言及可能な内容となっている。すなわち、環境保全や環境への負荷の低減は、環境面での公平性（社会側面）にも関係があり、天然資源の消費の抑制は、経済の発展（経済側面）や資源利用面での公平性（社会側面）に深い関係がある。

また、目的を達成するための 対策分野としては、廃棄物問題関連分野とともに、その他の多様な環境問題関連分野が示されていた。

以上のような、循環の概念や、目的、対策分野から考察すると、循環型社会像は少しずつ異なっている。例えば、図3は目的と対策分野の観点から検討した循環型社会像をマッピングしたものである。中でも対策分野の違いは、循環の概念と深く関係している。すなわち、「経済社会における資源循環」に主眼をおけば、廃棄物問題関連分野の対策が主となる社会像となり、「自然の循環」に主眼をおけば、その他の環境問題関連分野の対策が幅広く含まれた社会像となる。また、同じ対策分野であっても、何を目的に掲げるかによって対策の内容は異なったものになる。例えば、同じリサイクルでも廃棄物を減らすためのリサイクルと、天然資源の消費を抑制するためのリサイクルでは内容が異なろう。循環型社会について議論するとき、その「循環」の意味するところやその社会の目的を明確にする必要がある。今後、「循環」の意味するところやその社会の目的について議論を深め、概念を形成していく必要があるだろう。共通の概念形成が無理であるならば、少なくとも区別が必要である。

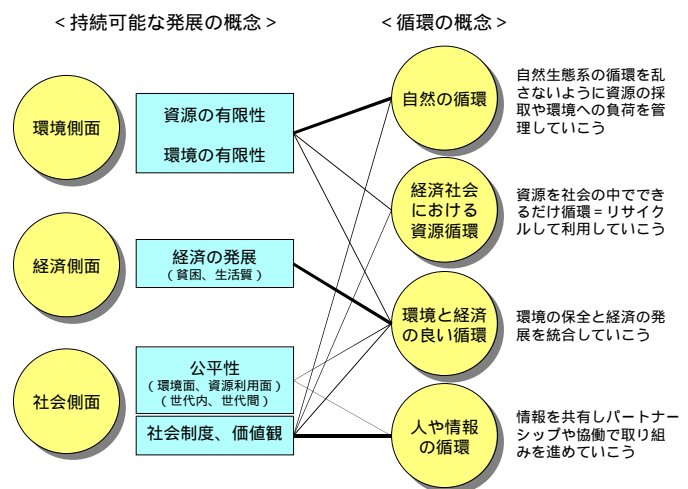


図1 持続可能な発展の概念と循環の概念の関係

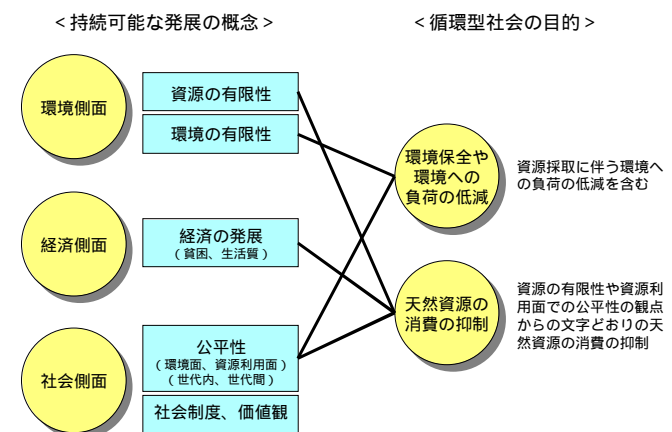


図2 持続可能な発展の概念と循環型社会の目的の関係

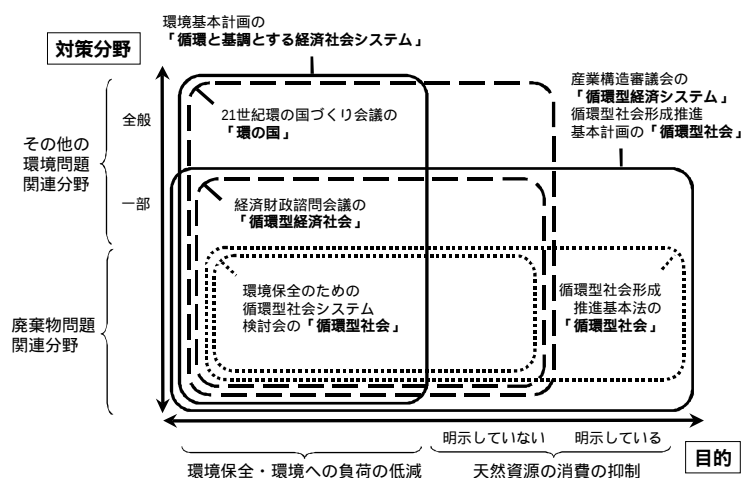


図3 目的と対策分野からみた循環型社会像の違い